

立教大学ジェンダーフォーラム主催 第88回ジェンダーセッション  
「フェミニズム／フェミニティと「成熟」：運動と理論をつなぐために」

日時： 2023年1月21日（土） 14：00～15：30

講師： 西村紗知氏（批評家）・住本麻子氏（ライター）

会場： 池袋キャンパス7号館7102教室、およびZoomウェビナーによるハイブリッド開催

第88回ジェンダーセッションは、文芸誌で活躍されている批評家の西村紗知氏とライターの住本麻子氏をお招きし、昨今、再注目されている「成熟」という用語を手がかりに、フェミニズム／フェミニティに関する理論と運動の接続についてお話しいただきました。

批評家・江藤淳は、著書『成熟と喪失』（1967年）において、近代社会が前提とする家族や地縁共同体からの個人の自立とそれを阻害するものとしての日本における母子の感情的な密着に注目しました。息子に良い教育を受けさせ自立を促しながらも子離れに葛藤する母親像と、母から自立することに罪悪感を抱える息子像を核とした江藤の「成熟」は、これまで母と息子／娘の関係を問うフェミニズム的な観点で言及されてきました。さらに西村氏は、しばしば未成熟とみなされる男性的なオタク文化（アイドルや特撮映画など）の文脈でも「成熟」が論じられてきたことや、近年それらの文化がオリンピックなどの国家的なイベントでも流用されていることに注目します。こうした状況に加え、「成熟」が新自由主義体制下における自助や自己責任とも親和的であることに言及した上で、西村氏はそれとは異なる「成熟」がどのような形で可能か問いかけます。西村氏は「成熟」が、個人の成長や結婚・出産などの社会が要請するライフコースといった時間的概念で捉えられる傾向にあることに着目し、単線的な時間とは異なる反省や他者への応答を踏まえた「成熟」のモデルの必要性を説きます。

これに答えて、住本氏は「成熟」を運動論に引きつけて考察します。住本氏は、優生保護法改悪阻止闘争において女性のリプロダクティブ・ヘルス／ライツを主張したウーマンリブと、母の子殺しを問題化した障害者運動の対立および共闘に触れ、両者が単純な母子の切り離しや母への批判とは異なる運動の「成熟」に至ったことに注目します。また、運動組織は内外の摩擦により短期間に終わることが多く、長い時間をかけた「成熟」が困難なように見えます。それに対し住本氏は、コミュニティとしての運動体が一旦、解散した後も、ネットワークとして問題関心は生き残り、再び別の形で結集し得ることから、個人の成長物語に基づく既存の「成熟」モデルとは違った、運動の「凍結と解凍」という「成熟」のあり方を提唱しました。

両者の議論は、一見、学生には縁遠い理論と運動に関するもののように見えて、ポスト・フェミニズムとも称される今日の状況下で、個人が他者と共に生きることを模索したアクチュアルな示唆に富むものでした。質疑応答では、地域の女性センターに務める一般参加者の方から、現在、母・娘・さらにその娘世代を越えた運動や経験の継承が課題になっていることが指摘され、お二人の議論を現場レベルでどのように活かせるかが話し合われました。また、2022年6月に開催された当フォーラム主催の公開講演会では、岡野八代氏をお招きし、ケア論についてお話しいただきましたが、西村氏からは「成熟」の問題とケア論の関連についても言及され、はからずも今年度のフォーラムの活動を振り返るようなイベントになりました。刺激的な議論をしてくださった両氏に心から感謝申し上げます。

（立教大学ジェンダーフォーラム事務局 横山美和・片岡佑介）

